

第3回 ESD 構成主義研究会概要報告

- ◇開催日時 平成29年5月26日(金)18時30分～20時
- ◇会場 中澤研究室
- ◇参加者 新宮、河野、中澤
- ◇内容

テキスト『状況に埋め込まれた学習』(ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ジェンガー、佐伯胖訳
産業図書、平成5年)

第1章「正統的周辺参加」

- ・状況に埋め込まれた学習には、正統的周辺参加が含まれる
- ・正統的周辺参加とは何か?
到達点は一義的ではない。多様である。
十全的参加:あこがれをもって前進全霊で取り組む状態 主体的参加
- ・学習とは、言説と行動、経験がひとまとまりであった。それが、ほとんどの徒弟を一人前の親方に育てた。今の学校教育では、ほとんどのものが、落ちこぼれてしまう。学校教育を問い直す視点になるのではないか。
- ・学習とは社会的実践の統合的かつそれと不可分の側面である。
学習は参加することが目的で、それが結果的に学習になっている。
学習は社会的実践の統合的側面を持つとは:様々な実践を統合することで、理解が深まる。
- ・一般的な知識と言われるものは抽象化された知識であり、それはどの場面でも使えない知識である。
一般的な知識には手続きが省かれている。



- ・状況に埋め込まれているという性質
対話を通じて、言葉の意味が共有されていく
関与した人々にとって関心を持たれたものである:状況に埋め込まれた私たち集団であるがゆえに、その課題に関心を持つ←関心が低いとは、参加者になっていないということ。
知識や学習がそれぞれ関係的であること:構造化された知識の獲得
- ・正統的周辺参加とは参加しているという「ある」存在が重要である。

そのことで、参加者を部分的参加者から十全的参加者へと変容していくことにもなる。

- ・周辺性:生かされるときはことのはじまり

のめりこむことで、他者からの刺激を受け、理解が深まっていく。

- ・学校組織は、知識は脱文脈化できるという主張にもとづいている
- ・どう教えるかよりも、どのように学ぶかが大切。授業の主役は子どもである。

徒弟制は、人類が学びやすい、人類にぴったりの教育システムである。(歴史的文化的側面から見て)
それをつかって、学校教育を問い直すことで、今の教育を改善することができるだろう

ポイントは、内容に焦点を当てて「どう教えるか」にこだわるのではなく、子どもという「人間」に焦点

を当てて、「何をどう学んだか」ということにこだわるべきだろう。

ESD は価値観と行動の変革を促すものであることから、変容がなければいい授業実践だとは言えない。どのように変容したか、それはなぜなのかを研究すること。

